平成 29 年度地域づくり海外調査研究事業調査報告書

オランダの認知症カフェから学ぶ

～認知症になっても安心して暮らせる地域づくり～

調査地 ： オランダ　アメルスフォート・ヒルバーサム

（アルツハイマー協会・アルツハマーカフェ ヒルバーサム）

調査期間 ： 平成 29 年 6 月 12 日～20 日

平成 29 年 10 月

一般財団法人　地域活性化センター

振興部　地域支援業務課　中村　明子

目　　次

1. はじめに
(1) 日本における認知症施策ー認知症カフェのはじまり　P1
(2) 日本における認知症カフェの現状　P2
(3) 調査の目的・方法　P4
2. 認知症カフェの起源　P5
3. 視察
(1) アルツハイマー協会（alzheimer nedarland）　P5
① オランダの現状
② アルツハイマー協会の目的・事業
③ アルツハイマーカフェ概要・アルツハイマー協会の役割
(2) アルツハイマーカフェ ヒルバーサム（alzheimer café-hilversum）　P7
① 開設場所
② 開設時間
③ 会場配置
④ タイムスケジュール
⑤ Q&A
4. 視察で感じたこと
(1) 認知症カフェ事業の特色　P9
① ガイドライン・マニュアル・品質管理基準の存在
② カンバセーションリーダーの存在
③ アルツハイマー協会の存在
④ ボランティアの存在
(2) オランダの特色　P11
① 空間デザインへの関心の高さ
② 一石二鳥の工夫
5. まとめ
(1) 提案―オランダで学んだことを参考にして　P12
① スタッフの確保
② 開催場所・タイムスケジュール等具体的事項の検討
③ 参加者の確保
④ 行政の支援
(2) 認知症になっても安心して暮らせる地域づくりー認知症カフェの役割　P14

1. はじめに

認知症は、「老いに伴う病気の１つで、さまざまな原因で脳の細胞が死ぬか働きが悪くなることによって、記憶・判断力の障害などが起こり、意識障害はないものの社会生活や対人関係に支障が出ている状態（およそ６ヵ月以上継続）をいう」とされている（政府広報オンライン）。

厚生労働省の発表[1]によると、認知症の人は 2012（平成 24）年で約 462 万人、高齢者（65 歳以上）の約 7 人に 1 人と推計されている。2025（平成 37）年には認知症の人は約 700 万人前後になり、高齢者（65 歳以上）に占める割合は、約 5 人に 1 人に上昇、わずか 10 年余りで、認知症の人が 1.5 倍に急増する見込みである。

認知症は、高齢になるほど発症率が高くなる。高齢化率が上昇傾向にある日本において、認知症になっても安心して暮らせる地域づくりが求められている。

（1）日本における認知症施策－認知症カフェのはじまり

認知症は、かつて“痴呆症”と呼ばれていた。“痴呆”という言葉は偏見を生み、病気になることへの恐怖心から、早期発見・早期診断が進まない原因にもなっていた。

2004（平成 16）年、国は「“痴呆”に替わる用語に関する検討会」を設け、パブリックコメントや医療・福祉の関係者の意見をふまえ、同年 12 月に病名を“認知症”に改めた。

改名を契機に、翌年 2005（平成 17）年 4 月には「認知症を知り地域をつくる 10 ヵ年」の構想を定め、『認知症になっても安心して暮らせる地域』を目指し、認知症サポーター[2]養成事業を開始した。現在の認知症サポーター数は 900 万人を超える。しかし、認知症サポーターに義務つけられた活動はなく、あくまで自分のできる範囲でよいとされている。例えば、友人や家族にその知識を伝える、認知症になった人や家族の気持ちを理解するよう努める、隣人あるいは商店・交通機関といったまちで働く人としてできる範囲で手助けをするなど、活動内容は人それぞれである。なかには養成講座受講で終わってしまう人もおり、認知症サポーターの有効活用が課題となっている。

2012（平成 24）年 9 月、国は、研究開発、医療、介護、本人・家族に対する支援等の対策についてとりまとめた「認知症施策推進５か年計画（オレンジプラン）」を発表した。このオレンジプランでは 7 つの項目を定めており、そのなかの『地域での日常生活・家族の支援の強化』で、はじめて“認知症カフェ”が登場する。

---

1 新オレンジプラン（平成 27 年 1 月 27 日）

2 認知症について理解し、認知症の人やその家族を温かく見守り、支援する人材のこと。

「認知症施策推進５か年計画（オレンジプラン）」
5．地域での日常生活・家族の支援の強化
○認知症の人やその家族等に対する支援
平成 25 年度以降　*「認知症カフェ」*（認知症の人と家族、地域住民、専門職等の誰もが参加でき、集う場）の普及などにより、認知症の人やその家族等に対する支援を推進

その後も国はさらなる認知症ケアの充実を目指し、2015（平成 27）年 1 月にオレンジプランを改定し、「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～（新オレンジプラン）」を発表した。これは、『認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現』を目標とし、厚生労働省だけでなく関係府省庁（内閣官房、内閣府、警察庁、金融庁、消費者庁、総務省、法務省、文部科学省、農林水産省、経済産業省、国土交通省）が共同して策定したものであり、これら関係省庁が連携して事業に取り組んでいくとされている。この新オレンジプランでも基本的考え方として 7 つの項目を定めており、そのなかの『認知症の人の介護者への支援』・『認知症の人やその家族の視点の重視』において、“認知症カフェ”が登場する。

「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）」
4．認知症の人の介護者への支援
○認知症の人の介護者の負担軽減
認知症の人やその家族が、地域の人や専門家と相互に情報を共有し、お互いを理解し合う*認知症カフェ*等の設置を推進
【*認知症カフェ等*の設置】（目標新設）
2018（平成 30）年度～すべての市町村に配置される認知症地域支援推進員等の企画により地域の実情に応じ実施
7．認知症の人やその家族の視点の重視
○初期段階の認知症の人のニーズ把握や生きがい支援
初期段階の認知症の人を単に支えられる側と考えるだけでなく、認知症とともによりよく生きていただけるよう環境整備を行っていく観点からは、例えば*認知症カフェ*で認知症の人を単にお客さんとして捉えるだけでなく、希望する人にはその運営に参画してもらい、このような中で認知症の人同士の繋がりを築いて、*カフェ*を超えた地域の中での更なる活動へと繋げていけるような、認知症の人の生きがいづくりを支援する取組を推進

この文章から、日本における認知症カフェの対象が“認知症の人やその家族、地域の人、専門家”であること、その目的が“情報交換、お互いを理解し合う場”であることが読み取れる。さらには、認知症カフェが“認知症の人が地域へと活動範囲を広げるきっかけとなる場”として活用されることも期待されている。

(2) 日本における認知症カフェの現状

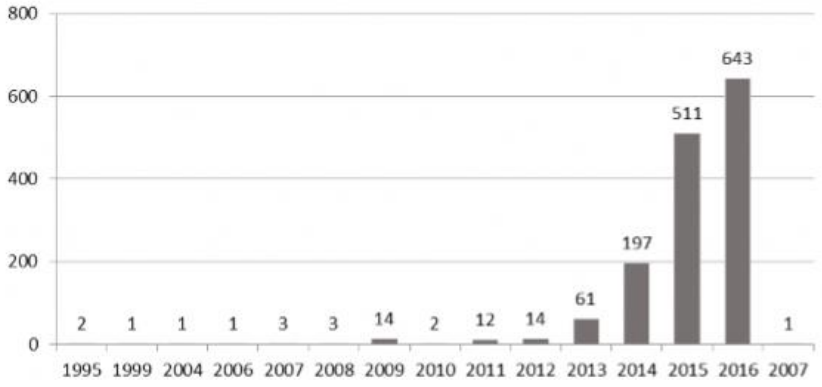
国の施策で“認知症カフェ”が登場して以降、全国各地に開設が進んでいる。2017（平成 29）年 3 月、社会福祉法人東北福祉会認知症介護研究・研修仙台センターが作成した「認知症カフェの実態に関する調査研究事業（平成 28 年度老人保健健康増進等

事業：国庫補助事業）報告書」において、設置状況や社会的課題等の調査結果が公表されている。

【調査期間：2016（平成 28）年 11 月～12 月、
調査対象：認知症カフェ実施運営者、回収率：54.1%　1,477/2,728 件】

○経年設置件数

	1995	1999	2004	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	合計
件数	2	1	1	1	3	3	14	2	12	14	61	197	511	643	1	1466
%	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	0.2	0.1	0.8	1.0	4.2	13.5	35.1	44.2	0.1	100



○運営主体　※複数回答

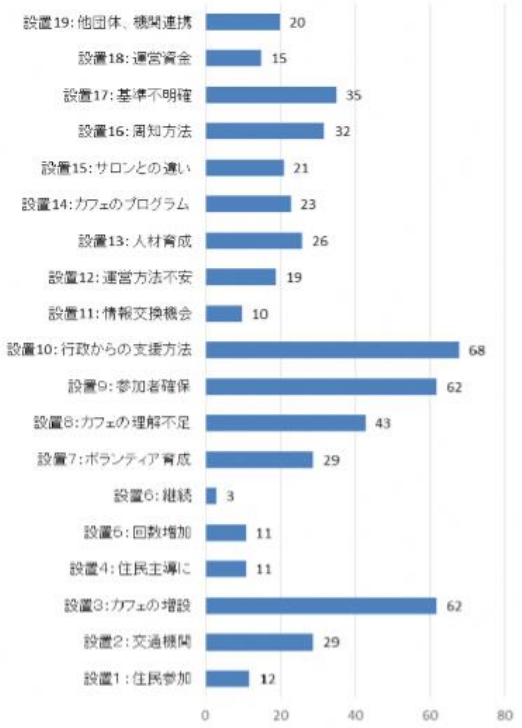
	家族の会	市町村	都道府県	社会福祉協議会	地域包括支援センター	居宅介護支援事業所	特養老健	医療機関	居宅サービス	GH小規模	有料老人ホーム	NPO	障害者	大学・学校法人	民間企業	町内会等	ボランティア	複数団体	その他
件数	98	148	6	101	500	85	191	125	136	221	28	121	6	9	25	60	113	43	109
%	6.7	10.0	0.4	6.9	33.9	5.1	13.0	8.5	9.2	15.0	1.9	8.2	0.4	0.6	1.7	4.1	7.5	2.9	7.4

○開始までの課題　※複数回答

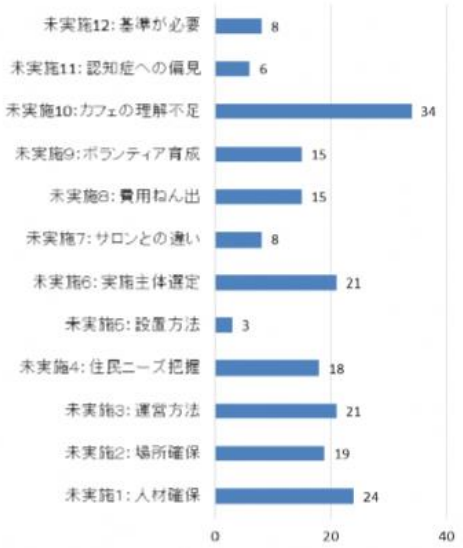
	場所	プログラム	費用	広報	組織の理解	地域の理解	その他
件数	498	902	578	918	226	465	203
%	33.1	60.0	38.5	61.1	15.0	30.9	13.5

【調査期間：2016（平成 28）年 9 月～10 月、
対象：政令指定都市・市区町村認知症施策担当、回収率：57.2% 996 件/1,741 件】

○認知症カフェ設置自治体の課題



○認知症カフェ未設置自治体の課題



※数値は件数を示す

「認知症カフェの実態に関する調査研究事業」調査結果によると、認知症カフェの新設はオレンジプランが施行された 2012（平成 24）年から徐々に増え続け、新オレンジプランが発表された 2015（平成 27）年に急増していることがわかる。なお、運営主体は、地域包括支援センターが一番多く、次いでグループホーム・小規模多機能ホームが多い。また、開設にあたっては広報やプログラムを定める必要があり、開設後は助成金等の行政支援や参加者確保が大きな課題である。開設が進んでいない自治体については、認知症カフェの理解の不足や人材不足が大きな課題となっている。

(3) 調査の目的・方法

新オレンジプランにて、認知症カフェの対象と目的が明らかになったが、具体的な取組は各地域に委ねられている。日本では認知症の人と家族の会、高齢者サロンやケアラーズカフェといった場が既に存在しているため、各地域で認知症カフェの必要性を整理する必要がある。また、開設にあたっては、開催場所や時間、タイムスケジュール、運営体制についても考える必要がある。各地域における検討事項は多いものの、日本における認知症カフェの歴史は浅く、判断に頭を悩ますところが多い。

そこで本調査では、認知症カフェ発祥の地であるオランダを調査地とし、発足当初から運営に関わっている「アルツハイマー[3]協会」、地域で開催されている「アルツハイマーカフェヒルバーサム」の二箇所を視察し、そこで得た情報や、現場で感じたことについて整理したうえで、日本における認知症カフェに活用できること等、私なりの考えを提示したい。

2. 認知症カフェの起源

認知症カフェは、老年精神医学専門研究センターの老年臨床心理学者ベレ・ミーセン博士の新しい発想をもとに、オランダではじまった。

当時のオランダでは、認知症に対する偏見を持つ人が多く、認知症という病気を話題にしにくかった。ミーセン博士は、認知症本人や家族との関わり合いを通じて、認知症という病気を受け入れることが難しいこと、当事者にとって暮らしにくい環境が多々みられることを目の当たりにした。

そこで、ミーセン博士は、「認知症について、くつろいで気軽に話すことができる場、知識や情報を手に入れることができる場」がつくれればと考え、アルツハイマー協会と協力し、数ヵ月の準備期間を経て、1997 年に最初の認知症カフェを開設した。当初参加人数は 20 名ほどだったが、翌月 35 人、翌々月 54 人、3 ヶ月後に 80 名と増加し続け、すぐに 100 名を超えた。このことは社会におけるニーズの大きさを証明しており、国内でテレビ放送されるなど話題となり、短期間で各地域に普及していった。

3. 視察

(1) アルツハイマー協会（alzheimer nedarland）

視察月日：平成 29 年 6 月 14 日（水）14 時～15 時半

対応者：地域コーディネーター　クリスチャン・メイボーム氏

① オランダの現状

▲取材のようす

人口約 1,700 万人、うち 65 歳以上は約 280 万人となっている。認知症の症状がある人は約 26 万人で、2040 年には 50 万人まで急増する見込みである。現在、認知症の症状がある人の約 7 割が自宅で暮らしているが、国はこれを 8 割まで増やすことを目標としている。オランダにおいて認知症は最もコストがかかる疾患とされており、施設入居者数を減らしていくことが課題となっている。

[3] アルツハイマー型が多くを占めるため、世界では認知症のことを総称してアルツハイマーと呼んでいる。日本では認知症カフェと呼ばれているが、世界ではアルツハイマーカフェという名称が一般的である。

② アルツハイマー協会の目的・事業

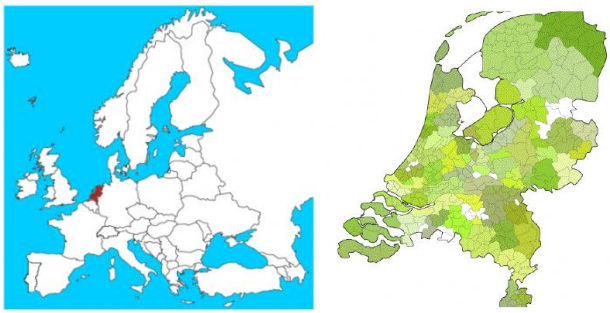
1984 年に設立され、本部をオランダ国土の中心に位置するアメルスフォートに置いている。地域支部は 48 箇所、専任スタッフ 75 人とボランティアスタッフ約 5,000 人が一体となって、「認知症本人や介護者の生活の質の改善」や「認知症予防」、「早期・的確な治療」を目指し、以下の事業に取り組んでいる。

▲アルツハイマー協会入居ビル外観
（福祉関係団体が複数入居）

・ウェブを活用した本人及び介護者への情報提供
・アルツハイマーカフェに関すること
　※開設や継続に関する相談受付等サポートを行っている
・認知症に関する調査・研究
・ロビー活動、各メディアを使った啓蒙活動

なお、事業費（年収 約 1,800 万€）のほとんどが個人や団体からの寄付であり、資金調達活動も積極的に行っている。

③ アルツハイマーカフェ概要・アルツハイマー協会の役割



▲オランダ（左図）位置図、（右図）自治体図
（アルツハイマー協会「オランダにおける認知症国家戦略」より転用）

オランダの国土は 41,864 ㎢（九州とほぼ同じ面積）で行政区は、12 の州に分けられた広域自治体とさらに 443 に細分化された基礎自治体（ヘメーンテ）の二層制である。認知症カフェは、集客に偏り生じないようアルツハイマー協会が計画的に設置しており、現在、240 を超える。同協会は「アルツハイマーカフェ」を主要事業としており、ユーロ圏における商標登録も行っている。

なお、同協会のアルツハイマーカフェに関する主な役割は以下のとおりである。

・ガイドライン・マニュアルの作成（詳細は、後述する【　　】のとおり）
・ボランティアの研修に関すること
・地域や介護事業者、専門職人材のコーディネート
・広報活動（地域新聞やウェブ、口コミ広告、チラシ作成等）

【アルツハイマーカフェの対象・目的】

対象－認知症本人や家族、友達、地域住民、専門職などだれでも参加できる
目的－認知症についての社会意識を改善する
　　認知症の対応について学ぶ、お互いの経験からヒントを得る場を提供する
　　認知症本人や介護者が外に出るきっかけをつくり、ケアを行う者と出会う機会とする

認知症に関する情報を得る場を提供する

【アルツハイマーカフェのタイムスケジュール】

30 分毎の以下のプログラムに従って行う

・歓迎の時間－学びの時間まで、参加者同士で交流を深める
　　最初のコミュニケーション、名前を名乗ることを大切にしており、
　　参加者にネームプレートを配布しない

・学びの時間－認知症に関する幅広い情報を提供する
　　※内容については、参加者のニーズに応じ各地域で自由に決めることができる

・休憩時間－スタッフは参加者が内容を把握できたか聞き取りを行う

・質疑応答・ディスカッションの時間

・出発の時間－スタッフは自宅に無事に帰れるかどうかを確認する
　　必要なケアや、参加してどうだったかの聞き取りを行う

(2) アルツハイマーカフェ ヒルバーサム（alzheimer café-hilversum）

視察日時：平成 29 年 6 月 14 日（水）19 時～22 時

① 開設場所

囲碁、ベリーダンス、高齢者向けパソコン教室等を内容として、子どもから高齢者まで幅広い世代が利用する地区センター（wijkcentrum de koepel）の多目的スペースで開催している。最寄りのバス停から徒歩 5 分で、地区センターには駐車場・駐輪場もあり、どの交通手段でも通いやすい。

▲地区センター入口

▲地区センター外観

▲地区センター最寄りバス停

すぐ隣にはショッピングセンター（Winkelcentrum Kerkelanden）が立地しており、買い物ついでに参加することができる。お店側も店員に対し高齢者対応についての教育を自主的に行っており、高齢者が安心して利用できる環境づくりに積極的である。

▲ショッピングセンター入口

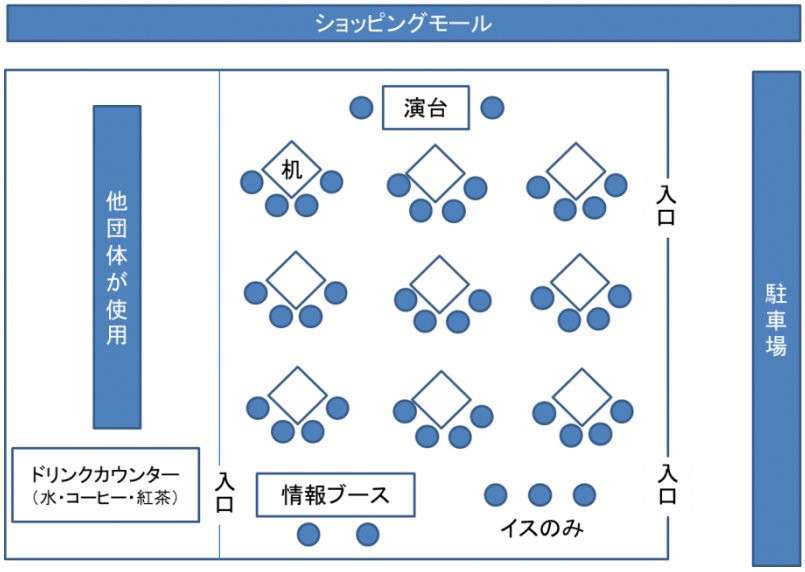
▲ショッピングセンター内観▲

② 開設時間

毎月第 2 水曜日、19 時半～21 時（歓迎の時間・出発の時間を除く）に開催されている。オランダは世界一夕食を終えるのが早い国といわれており、多くの人が 18 時頃に夕食を終え、その後カフェを楽しむ。オランダ人のライフスタイルにあわせ、多くのアルツハイマーカフェが 19 時頃から始められている。

③ 会場配置

写真撮影が認められなかったため、図を用いてご紹介する。



○隣の多目的スペースでは高齢者がビリヤードを22時まで楽しんでおり、施設付属のドリンクカウンターを一緒に利用している。
○スタッフは情報ブースや各テーブルに配置、参加者にわかりやすいよう緑色の名札を着用している。
○演台には、講師とカンバセーションリーダーの２名が立つ。
○受付なし、出入り自由
○見学のみの者は後方のイスを使用
○講義中疑問に感じたことをメモできるよう、予め各テーブルに質問用紙を配布
○当日は暑かったため、駐車場側入口は常に開放。外の音が聞こえ、静か過ぎずリラックスして聞けた。

④ タイムスケジュール

アルツハイマー協会が定めたタイムスケジュールに従って開催されている。

19 時頃～　歓迎の時間（開始時間まで個々のタイミングで入場）
　　－参加者同士で挨拶
　　－飲み物（水・コーヒー・紅茶）やお菓子（チョコレート）の配布
　　－情報ブースでパンフレット配布

19 時半～　カンバセーションリーダーによる講師・専門職スタッフの紹介
　　講義「認知症とは何か」
　　－アルツハイマー型、レビー小体型認知症等の症状や経過の違い
　　－認知症の診断方法や治療について
　　－予防や進行を遅らせるために必要なこと　等

20 時～　休憩時間
　　－質問用紙記入
　　－カンバセーションリーダーが各グループを巡回、感想を聞く

20 時半～　質疑応答・ディスカッションの時間

－カンバセーションリーダーがマイクランし、質問が不明確な場合は、質問者に確認したうえで、講師につなぐ。質問者が納得できるまで時間をかける。

（質問例）認知症は遺伝するのか、どこの病院が良いか、服用している薬とその効果について、認知症になってから物を捨てられないようになったがどう対応したらよいか　等

21 時～　　出発の時間

－講師へ花束贈呈、次回案内

－相談対応

－情報ブースでパンフレット配布

情報ブースで配布されていたパンフレット▲
（アルツハイマー協会が作成したもの）

⑤ Q&A

アルツハイマーカフェ見学後、以下について、スタッフに話を聞いた。

・スタッフメンバー

運営委員会 7 名（デイケアセンター、在宅ケア等専門スタッフ）と近所のボランティア 8 名の計 15 名

・周知方法

専門職スタッフ所属組織での周知活動（口頭案内、HP、チラシ配置等）のほか、高齢者に愛読者が多いフリー新聞（地区）への広告掲載等高齢者が目にしやすい機会を活用している。

・講義テーマの選定

運営委員会が参加者に聞き取りを行い、要望が高いテーマで実施しており、実際にやってみて好評だったテーマ（施設に入る、症状経過、安楽死等）は繰り返し採用している。

・困っていることや不安なこと

年 6 回運営委員会でミーティングをしている。専門職スタッフや地域のボランティアが多数在籍しているので、今のところ困っていることや不安を感じていることはない。

4. 視察で感じたこと

(1) 認知症カフェ事業の特色

① ガイドライン・マニュアル・品質管理基準の存在

日本とオランダとの大きな違いは、認知症カフェの運営の基準が具体化されていることである。アルツハイマー協会では、3－(1)－③で記載した、目的・対象・タイムスケ

ジュールに加え、33 項目からなる品質管理基準も定めている。以下は一部を抜粋したものだが、これだけ詳細に書面化されていれば、運営側はすぐに実行することができる。

参加者側にとっては、常に安定したサービスを受けることが期待でき、新設の場合であっても安心して足を運ぶことができる。

【33 項目の品質管理基準（一部抜粋)】

・少なくとも年 10 回開催すること
・各月の決まった日に開催すること（例：月の第 1 火曜日）
・参加者の少なくとも 5%は認知症本人であること
・毎回、参加者（認知症本人・家族・友人・その他等）数をカウントすること
・会場内にアルツハイマー協会や各種団体が作成したパンフレットを配布する情報ブースを設けること
・情報ブースには、アルツハイマー協会スタッフ又は専門職ボランティアを少なくとも 1 名配置すること
・無料で参加できるようにし、開催中に寄付を求めないこと
・講演者として依頼される専門家の 7 割は、その地域で仕事している人であること
・運営委員会は、アルツハイマー協会の地域支部、地域の認知症ケア団体（少なくとも 3 つの異なる専門分野）のボランティアで構成されること
・運営委員会は、地域の報道機関から知名度を得られるよう少なくとも年 2 回広報活動を行うこと
・運営委員会は、少なくとも 2、3 年ごとに、雰囲気、内容、情報ブースについて評価を行うこと

② カンバセーションリーダーの存在

アルツハイマーカフェ ヒルバーサムを見学した際に、カンバセーションリーダーが進行のアシストをしていたのが印象的であった。具体的には、講師の説明をわかりやすく言い換えたり、講師に補足説明を求めたり、質疑応答について皆で一緒に考えたほうがいいものについては参加者に意見を求める等の役割を果たしていた。

カンバセーションリーダーは、会場にいる全員が話の内容を理解できるようにするとともに、現場の雰囲気づくりに大変重要な役割を担っている。ヒルバーサムのアルツハイマーカフェは、一緒に笑い、皆で考え、意見を言い合う、まるで学校のような雰囲気であった。

なお、カンバセーションリーダーは、医療や福祉といった専門職である必要はなく、アルツハイマー協会の研修を修了すれば、誰でもなることが可能である。専門職でないからこそ、参加者の気持ちを察することができ、同じ目線に立つことができる。認知症について学ぶことに軸をおく、オランダの認知症カフェではカンバセーションリーダーは大きな存在といえる。

③ アルツハイマー協会の存在

日本では各地域に委ねられている開設場所やタイムスケジュール等の検討や人材のコーディネート・育成等は、全てアルツハイマー協会が担っている。また、同協会は認知症カフェに関する相談も受付しており、運営で問題が生じた際、いつでも問い合わせが可能である。このように、オランダでは運営側が安心して従事できる環境づくりができてきる。

④ ボランティアの存在

アルツハイマーカフェは約 2,500 人のボランティアにより運営されており、年齢は 20～70 代、職種も幅広くなっている。しかし、10 年前は認知症への関心が低く、65 歳以上のリタイア層（ヘルスケア経験者）ばかりだったとのことであり、長い時間をかけて認知症への関心を高め、人材の確保を図っていった。アルツハイマー協会は、今後もボランティア人材を確保するため､引き続き啓発活動を行っていくという。

▲認知症の人が日々直面する思い
「コーヒーはどこで飲みますか？」
アルツハイマー協会の啓発活動の一例
（アルツハイマー協会「オランダにおける認知症国家戦略」より転用）

(2) オランダの特色

① 空間デザインへの関心の高さ

オランダ国内を歩いてみて､アート要素を含んだ場所が多数存在していることに驚いた。アルツハイマー協会が入居しているビルでは、遊び心のある色鮮やかなフロントや、認知症患者の肖像画が飾られているお洒落なカフェスペースがあった。

空間デザインは、色・形・光の取り入れ方等を一定のテーマに沿って設計することで、人の心を癒したり、テンションを高めたりする効果をもたらすことができるとされている。

オランダでは、公共の建築費の一部をアートに使わなければならないルールがあり、民間部門だけでなく公共部門においても、空間デザインへの関心が高い。

▲アルツハイマー協会入居ビル
（上）フロント・（下）カフェスペース

◀アムステルダム中央図書館
（公共施設）内観

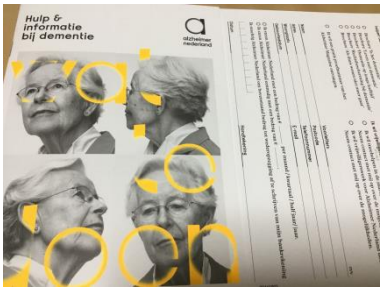
② 一石二鳥の工夫

▲ミッフィー博物館のようす

オランダ人は質素で堅実、無駄なことにお金を充てない倹約家が多いと聞く。こういった国民性からか、一石二鳥の工夫が至る所にあった。

例えば、アルツハイマーカフェ ヒルバーサムの会場となっている地区センターは、ショッピングセンターの隣に立地しており、視察の合間に立ち寄ったミッフィー博物館では、子どもが遊びながら交通安全を学ぶことができるフロアがある。

アルツハイマーカフェの情報ブースで配布されていた認知症判断チェック項目が記載されたパンフレットには、裏面に認知症の人と接する際に留意すべき 10 のポイントが記載され、さらにアルツハイマー協会の事業や寄付の仕方も案内されている。認知症ヘルプ＆インフォメーション冊子には、ハガキがついており、資料請求だけでなく、同時にボランティア登録や寄付申込が可能となっている。



▲ヘルプ＆インフォメーションブック
（ページ最後にハガキが付属、
切り離してすぐ送ることができる）

このような工夫は、限られた資源（モノ・バショ・ジカン）を有効活用するだけでなく、経費節減にもつながるものである。一つの取組で複数の利益を得ることは、オランダでは当たり前に行われている。

5. まとめ

(1) 提案―オランダで学んだことを参考にして

① スタッフの確保

日本における認知症カフェは、誰でも実施主体となることができ、スタッフの構成についても各地域で任意に選択できる。

新オレンジプランに対象や目標値が記載されたことで、認知症ケアに詳しい地域支援推進員が中心となり、医療・福祉・介護分野の専門機関を巻き込んだ体制づくりが期待される。ただ、専門職スタッフは本業もあり、ひとつの自治体で複数認知症カフェを開設する場合には、人材確保が課題となる。

オランダでは認知症支援をしたいと思うボランティアが多数存在していた。日本の場合、認知症サポーターがそれに代わるものとして期待できると考えられる。このことは、1－(1)で述べた認知症サポーターの人材活用の問題も同時に解決することができる。認知症サポーターは年齢層が幅広く、キャリアも様々であり、スタッフとして認知症サポーターを巻き込むことができれば、事業運営に係るアイディアを膨らませることにつながり、運営も強固なものにできるはずである。

スタッフの確保については、認知症サポーター養成講座で認知症カフェを知ってもらう、フォローアップ研修で認知症カフェの運営体験をしてもらう等、認知症サポーター

をターゲットにした呼びかけも検討すべき点である。

② 開催場所・タイムスケジュール等具体的事項の検討

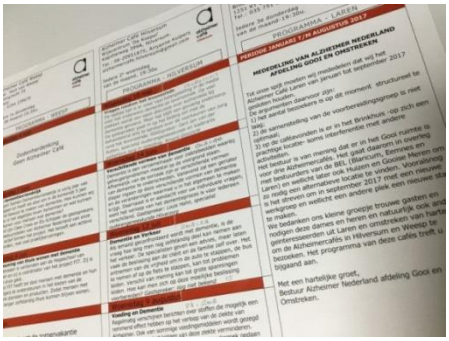
オランダでは、専門機関が連携してタイムスケジュールや品質評価基準等を定めている。日本では、新オレンジプランにて、対象・目的が提示されているものの、具体的な方法は各地域に委ねられている。このことは一見、日本の弱点とみられるかもしれないが、逆に、各地域の独自性が認められているという点でプラスともいえる。

1－(3)では既に認知症の人と家族の会等の場があると述べたが、既存サービスで本当に支援が足りているか、課題となっていることはないか、自治体による見直しも必要ではないかと感じた。その上で、認知症カフェの役割を整理し、地域での位置づけを考えるべきである。そこが明確になれば、開催場所・タイムスケジュール等具体的事項がイメージしやすくなるだろう。

③ 参加者の確保

オランダでは「カフェ」という言葉のとおり、「気軽にくつろげる場所」をつくるための工夫がされている。例えば、だれでも立ち寄りやすい敷居の低い場所に開設し、出入り自由・申込不要、無理なく過ごせるよう休憩時間を設ける等の措置がなされている。

また、オランダの認知症カフェは「社会意識の改善」も目的にしており、認知症に詳しくない人を呼び込む工夫がされている。右の写真のアルツハイマーカフェのチラシには、テーマや講師の職氏名だけでなく、講義の詳細な説明が記載されている。知識がなくても一読すれば何を学ぶことができるのかイメージすることができるようになっており、このような工夫は、日本でも参考にすべきものである。加えて、オランダでは定期的に品質評価も行っており、日本でも各地域で聞き取り調査を実施し、地域住民のリアルな声をもとに内容を拡充していく必要がある。



▲アルツハイマーカフェ チラシ
（３地域分が掲載されている、中央がヒルバーサム
赤部分がタイトル、下に説明文）

④ 行政の支援

新設・増設にあたっては、必要物品の購入のほか、既存会場を使用する場合でも改修費等の経費が必要となることがある。ただ、認知症カフェと既存サービスとの区別が曖昧であることを理由に、助成支援を行っていない自治体が多い。もし、5－(1)－②について整理し、効果や条件を明確にすることができれば、行政に認知症カフェの必要性を訴えることができる。行政側も、国・県の補助金活用や市町村の委託事業としての実施等、行政の支援のあり方について協議しやすくなると考えられる。

また、日本には、オランダのアルツハイマー協会のような、相談窓口が存在していな

い。行政は、資金面だけでなく、認知症カフェに関する学びの場や、認知症カフェに取り組む団体の情報交換会の場、広域での相互研修の機会の提供等、運営側の負担軽減につながる情報提供等についてできることを考えていく必要があるだろう。

(2) 認知症になっても安心して暮らせる地域づくりー認知症カフェの役割

国は、「認知症になっても安心して暮らせる地域づくり」を目指しているが、既存の介護保険サービス（デイケアや在宅介護等）は、介護認定を受けた認知症本人を対象としたもので、本人を支える人など全ての人に直接支援の手を差し伸べるものではない。

一方、新たに登場した認知症カフェは、介護保険サービスを拒む認知症本人や家族、関係者等、これまで支援を受けられなかった人にも手を差し伸べることができる。さらには、地域住民も広く対象にしており、社会意識の改善につなげることもできる。

本稿をまとめる前に日本の認知症カフェも見学したが、その際、参加された認知症の方が次のような話をされた。

「私は認知症である。勇気を持って、私が感じていることをお伝えしたい。認知症と診断されたときショックを受けた。自分自身ですぐに治してみせると思ったが、完治できない病気と知った時、目の前が真っ暗になった。自分の症状はどこまで進行するのか、今後どう生きていけばいいのか、不安な気持ちを抱いたまま、毎日を過ごしている」

認知症カフェは、認知症について思いを共有できる場である。認知症に無縁だった人もいつ関係者になるかわからない。できるだけ多くの人が自分事だと感じることができるようになれば、「認知症になっても安心して暮らせる地域づくり」が自然にできるようになるだろう。

日本における認知症カフェの認知度はまだ低い。本調査で得た情報を、自分の派遣元である八戸市や近隣自治体での取組に役立てるとともに、他自治体の取組においても参考になれば幸いである。

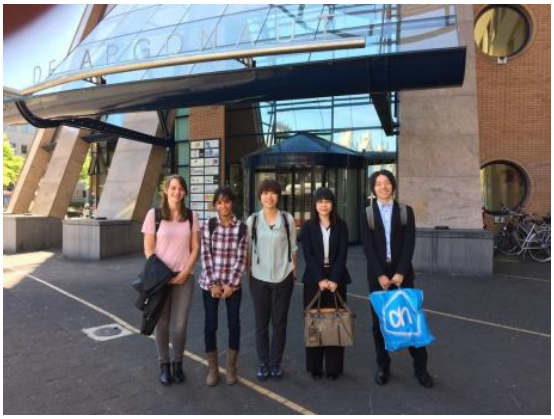
＝謝辞＝

調査にあっては、多くの方にご支援ご協力いただきました。

アムステルダムに本社を置く JCE(Japan Cultural Exchange)代表中條永味子氏は、難航していた視察先へのアポ取りにご尽力いただいただけでなく、オランダで気をつけることや日本との違いについてご教示いただきました。

通訳のインゲボルグ・ハンセン氏、JCE インターンシップ生のティルザ氏、ルース氏は、現地通訳やアテンドだけでなく、オランダ文化についても教えていただきました。

この場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



＝参考文献・HP＝

・武地一著「認知症カフェハンドブック」クリエイツかもがわ、2015 年
・浅岡雅子著「魅力あふれる認知症カフェの始め方・続け方」翔泳社、2015 年
・矢吹知之著「認知症カフェ読本」中央法規、2016 年
・社会福祉法人東北福祉会認知症介護研究・研修仙台センター著
「認知症カフェの実態に関する調査研究事業報告書」、2017 年
・厚生労働省 HP「認知症施策」（アクセス日：2017 年 10 月 20 日）
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000076236.html
・政府広報オンライン HP（アクセス日：2017 年 10 月 20 日）
「もし、家族や自分が認知症になったら 知っておきたい認知症のキホン」
http://www.gov-online.go.jp/useful/article/201308/1.html
・外務省 HP「オランダ基礎データ」（アクセス日：2017 年 10 月 20 日）
http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/netherlands/data.html
・一般社団法人北海道認知症グループホーム協会 HP
「オランダにおける認知症国家戦略」（アクセス日：2017 年 10 月 25 日）
http://www.h-gh.net/pdf/isonds/08.pdf
・アルツハイマー協会 HP
「アルツハイマーカフェヒルバーサム」（アクセス日：2017 年 10 月 25 日）
https://www.alzheimer-nederland.nl/regios/gooi-en-omstreken/alzheimer-cafe-hilversum